

【基調講演】

森山新（お茶の水女子大学）



日本・韓国を越えて “한국/일본”을 넘어  
Intercultural Citizenshipを育もう！

森山新（お茶の水女子大学）

### グローバル時代に求められる言語教育

글로벌 시대가 요구하는 언어교육

- 言語スキル (言語) 언어 기능(언어)
- 異文化理解 (文化) 이문화이해(문화)
- シティズンシップ教育 (政治) 시민성 교육(정치)
- 母語 (Monolingual) 모어
- 母語+外国語 (Bilingual) 모어+외국어
- 複言語 (Plurilingual) 복수 언어

↓

複言語・複文化教育によるIntercultural Citizenship教育  
복수 언어, 복수 문화교육을 의한 Intercultural Citizenship 교육

### ヨーロッパ（欧州連合）から学ぶ

유럽(EU)에서 배운다



### 欧州連合ができあがるまで

EU 설립과정

発効年	内容
1946年	欧州合衆国構想 (チャーチル) 유럽합중국 구상
1949年	欧州評議会 (初の汎ヨーロッパ機関) 유럽협의회
1952年	欧州石炭鉄鋼共同体 (パリ条約) 유럽석탄철강공동체
1967年	欧州諸共同体 (石炭鉄鋼・原子力・經濟) 유럽공동체
1993年	欧州連合 유럽연합

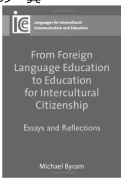
EU 확대

### 欧州の統合と言語

유럽 통합과 언어

- 国家が一部権力放棄、より国際的・欧州の観点導入 국가가 일부 권력 포기, 보다 국제적, 유럽적 관점 도입
- 他の言語 (複言語) が超国家的アイデンティティ形成の一翼 다른 언어(복수언어)가 초국가적 아이덴티티 형성
- 1つの政治形態への帰属：母語能力から複言語能力へ 하나의 정치형태로 귀속: 모어 능력에서 복수언어 능력으로
- 国家・超国家の緊張関係をいかに克服するか 국가, 초국가적 긴장관계를 어떻게 극복하는가
- 超国家的忠誠心・帰属意識が築けるか 초국가적 충성심, 귀속의식을 육성할 수 있는가

cf. Michael Byram



### 言語・文化教育

언어, 문화 교육

- 言語教育 언어교육
- 言語：アイデンティティ (帰属意識) 언어: 아이덴티티(귀속의식)
- 交流のスキル> 他国・言語の人と関係を持つ 교류를 위한 기능> 다른 나라, 언어 사람들과 관계를 가짐
- 文化教育：文化へのcriticalな気づき 문화 교육: 문화에 대한 critical한 깨달음
- 異文化理解は自他文化へのcriticalな姿勢・態度 이문화이해는 자기/타자 문화에 대한 critical한 자세, 태도

## 政治教育

정치 교육

- 政治教育：3つの目的 정치교육: 세가지 목적
- (1)望ましい政治行動への参加を学ぶ  
바람직한 정치행동 참여를 배운다
- (2)民主的な行動等式を学ぶ  
민주적인 행동양식을 배운다
- (3)公的関心を持つ  
공적 관심을 가진다
- 民主的行動を通じた民主的シティンシップ教育  
민주적 행동을 통한 민주적 시민성 교육

## 教育原理

교육 원리

- 交流の重要性：自分のグループに留まろうとする傾向を打破  
교류의 중요성: 자신의 그룹에 모이려고 하는 경향을 타파  
cf.交流のないところにステレオタイプ・自文化中心主義は生まれる  
교류없는곳에 스테레오타입, 자기문화 중심주의가 생긴다
- 良質な経験：良質なインターカルチュラルな経験  
질이 좋은 경험: 질이 좋은 문화들 초월한 경험  
特に政治的経験の提供  
특히 정치적 경험을 제공
- 特異性(多様性)の認識：全てのグループには特異性(多様性)  
특이성(다양성) 인식: 모든 그룹에는 특이성(다양성)이 있다

## 東アジアと何が違うか

동아시아와 무엇이 다른가

- 言語学習とヨーロッパ・アイデンティティとの強い関係  
언어학습과 유럽 아이덴티티와의 강한 관계
- 共同体の言語を学ぶ複言語である  
공동체 내 언어를 배우는 복수언어임
- シティンシップ教育  
시민성 교육
- 政治への主体的参加は権利であり、責任であるとする  
정치에 대한 주체적 참여는 권리이며 책임이다
- 国を超えた政策とアイデンティティ作りが始まっている  
국가를 초월한 정책과 아이덴티티특성이 시작되고 있다

## EUから東アジアへ

EU에서 동아시아에

- 言語教育・文化教育・政治教育を融合、ICを育む授業  
언어, 문화, 정치교육을 결합, 동화를 초월한 시민성을 육성하는 수업
- (1)言語：相手の言葉を使おう；スキル・価値  
(1)언어: 상대 언어를 사용: 가능, 가치
- (2)文化：価値観・アイデンティティの相違を克服  
(2)문화: 가치관, 아이덴티티의 차이를 극복
- (3)政治：理念(知識)から現実(実践)へ、現在から未来へ  
(3)정치: 이념(지식)에서 현실(실천)으로 현재에서 미래로

## 2015年を振り返る

2015년을 되돌아보자

- 戦後70年  
광복70년
- 日韓国交回復50年  
한일 수교 50년
- 日韓の政府は過去を克服できず  
한일 정부는 과거를 극복할 수 없었다
- 私たちはその限界を超えるべく様々な努力をしてきた  
우리는 그 한계를 극복하게끔 여러가지 노력을 해 왔다

## 戦後70年：日中の対話



**戦後70年：日中の対話**

<お茶大>

- ❑ 歴史教育 역사교육
- ❑ 対日・対中イメージ 대일/대중 이미지

<大連理工大>

- ❑ ステレオタイプ 스테레오타입
- ❑ マスコミ報道 메스컴보도
- ❑ 異文化理解 など 이문화이해 등

**戦後70年：日韓の対話**



**戦後70年：日中の対話**

<お茶大>

- ❑ 戦後処理・賠償問題 전후 처리, 배상 문제
- ❑ 領土問題 영토문제


<釜山外大>

- ❑ 慰安婦問題 위안부문제
- ❑ 日韓関係 (戦後の首相談話) 한일관계(일본총리 담화)

**第10回日韓大学生国際交流セミナー**



**第10回日韓大学生国際交流セミナー**



**グローバル化と言語教育**



大学生のみなさんに期待する！



## 参考文献

Byram Mychael (2008) *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship, Multilingual Matters* (バイラム・マイケル (2015) 『相互文化的能力を育む外国語教育: グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店)

森山新 (2015) 「Citizenship教育としての第二言語・文化教育」  
『2015年大葉大学日語教学国際学術研究会大会発表集』, 8-21

森山新 (2016) 「シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育」  
森山新他 (編) 『日本における第二言語習得研究: 二言語から多言語へ (仮)』 (編集)

李徳奉（同徳女子大学校）

アジア時代における韓日/日韓関係と  
学生交流の在り方

2015. 12. 21  
お茶の水女子大・同徳女子大合同  
国際学生フォーラム  
李徳奉  
同徳女子大学 名誉教授

### 講師紹介

- ・ 同徳女子大学日本語科教授(1983-2012)
  - ・ 同徳女子大学大学院員(2010-2012)
  - ・ 同徳女子大学名誉教授(2012-現在)
  - ・ 筑波大学言語学博士(応用言語学)
  - ・ 韓国日本学会 14-15代会長
  - ・ 日本国際交流基金日本語教育賞(2004)
  - ・ 韓国教育部中等教育課程研究開発委員(1987~2011.9)
  - ・ 筑波大、早稲田大、お茶の水女子大、南山大の大学院及び
  - ・ 北京日本学研究中心1-2年間の非常勤講師(2000-2012)
  - ・ 立正大学心理学部「対人社会心理学科」招聘教授(2010-2015)
  - ・ 明海大学日本語科客員教授(2000-2010)
  - ・ 韓国教育文化融・複合学会初代会長(2008-2010)
- 主な著書:
- ・ メタファーの心理学、東京：誠信書房(共著；1990)
  - ・ 日本語学の理解、ソウル；法文社(共訳；1991)
  - ・ 日本語教育の理論と方法、ソウル；時事日本語社(1998,2001改定)
  - ・ 総合的日本語教育を求めて、東京；国書刊行会(共編；2001)
  - ・ 現代日本語教育の理解、ソウル；C&J(編著；2008)
  - ・ 日本語教育と日本研究の連携、東京；ココ出版(共著；2010)

### パラドックスの韓・日関係

- ・ 一衣帯水の隣国
- ・ 近くて・遠い国
- ・ 空間的距離・心理的距離
  - ・ 現状：
- ・ 両国首脳3年半ぶりの会談
- ・ 歴史の捕虜となった両国の政治
- ・ 国家主義に埋没している両国

### 近と遠

- ・ 近：ハードウェア
- ・ 地理/気候/人種/言語(語順・漢字)/宗教
- ・ 遠：ソフトウェア
- ・ 歴史/政治/社会構造/言語文化/行動様式
  - ・ 近：ディスプレイ
- ・ 演歌/漫画・アニメ/お酒/カラオケ/情緒

### 日本における嫌韓ムード

- ・ 謝罪に疲れた日本
- ・ ‘参った’の日本、‘粘り’の韓国
  - ・ 絶えない悪材の韓・日関係
  - ・ 韓流ブームの反作用？
- ・ インターネットの普及による嫌日・嫌韓情報接触
  - ・ 韓国の中国寄りのbandwagon式政策
  - ・ 自信を取り戻す必要のある日本社会

### 悪化一路の両国関係

- ・ 解決者不在の両国関係
- ・ 紛争の解決は、両国政治の役割
  - ・ hate speechの横行
  - ・ ナショナリズムと力の秩序
- ・ グローバル化とパワーバランス
- ・ 歯止めの利かないSNSやマスコミ

### 隣国の法則

- 世界諸国の隣国関係における共通の現象
  - 愛憎の関係: 競争・争い・影響・協力
  - 相互共栄の運命: 歩調の知恵
  - 関係調節の知恵

### One Asia時代に向けて

- 岡倉天心の東洋主義
  - **Asia is One**
  - 東洋の思想 (1903)
- ワン・アジア財団 (佐藤洋治理事長2003)
- ワン・アジアクラブ運動

### アジアの未来

- 消費経済時代の市場・情報共有化時代における人口
  - コンピューターは人間の70億倍の情報量
    - 東アジア4国; 17億
    - 東南アジア10国; 6億
    - インド: 13億
  - 計36億世界人口70億の52%
    - アジアの総人口39億
    - 2020年には56億
  - 面積; 4,450万 (陸地14,894万) km<sup>2</sup>
    - (南極1,400万)
  - **Asian Century 2050(ADB2011)**

### 未来学者たちの予言

- 21世紀は「多極時代」
  - 地域ブロック化
- **New Global Order**
  - 巨大市場の購買力
  - 労働力の移動
- **Reverse Brain Drain**
  - アジアの責任感増大

### アジアの共通点

- 東アジア; 漢字文化圏、儒教・仏教文化圏
  - 黄色人種とインド人
    - 稲作りの文化
    - 地理的近接
    - 集団主義
  - 国家・民族中心

### アジアの相違点

- 多国家 49
- 多民族 150
- 多宗教: 4大宗教・八百万の神
  - 多言語 2,000以上
  - イデオロギーの残存
  - 歴史・領土認識の差
    - 人権の差
    - 貧富の差
    - 教育機会の差
  - 文化、風土、産業の差

## ワンアジア運動の意義

- 権力移動の際、考えられるあらゆる副作用を予防
  - 急なグローバル化に向けての準備教育
  - 多文化理解のための教育機会の共有
    - アジアの共生・共栄・平和に貢献
    - 世界の平和にも貢献

## ワンアジア共同体構築の三重の壁

- 自己の壁
  - 企業や組織の壁
  - 国家や民族の壁
- (佐藤理事長;2012仁川大会にて)
- 交流と連携の障害を取り除くための教育が求められる

## 韓・日両国の属性を理解

- 共通の鎖国の歴史:文化的島国どうし
- 両国とも500年以上一つの王朝が続いた珍しい歴史
- 強い単一意識:多様化に弱い両国;民族主義的傾向
- 傷ついた国民を励ますべき両国政府;
- 自国自慢の両国教育:歴史的過ちの正当化に走る
- 自我未熟の両国民:マスコミに振り回されやすい
- 国際倫理観の違い:国際化時代に「国際社会に倫理はない」「旅先の恥はかき捨て」のような考え方は困る
- 日本:災害型村中心社会:あうんの呼吸、NOと言えない、建前のコミュニケーション
- 韓国:戦乱型血縁中心社会:全てが納得いくまで突き詰める、本音のコミュニケーション

## 学生交流の在り方

- **日本語教育2012めやす:多文理解の理念;**
  - **他者の発見・自分の発見・つながりの実現**
- **平和な未来社会づくりに向けて**
- **平和は、ただでは味わえない。**
- **未来の平和は、私たちの手にかかっている。**

## 交流の多様化 深化と拡大

- 多文化間多極交流・多文化体験の交流
  - 溜まり場交流・村づくりの交流
- 交流の個別化・生活化(自主化)
  - 遠隔対面交流
  - SNS交流
- 社会の暗いところ・交流史の跡地
- 環境・人権など世界的懸案問題を考える
  - 一過性で終わらない交流

## 多文化理解を兼ねた 学生交流

- **アイデンティティー観の訂正**
  - 多元性・関係性重視
- 同化(片思い)でなく相互理解を目指す教育;両文化・多文化理解・交流という体験
- 異文化でない共通の文化を見つけること
- 交流の目的・効果:自文化の拡大より、
- 自分のアイデンティティーの拡大である
  - 拡大とは、多文化的アイデンティティー

### アジア時代の目指すべき目標

- 開かれた共同体づくり:地球市民として
  - アジアの位相確立
  - 地域内共生・共栄・平和の実現
- 東洋的価値観の共有:和・敬・仁・中庸
  - 多文化社会の実現
  - 人間の福祉に貢献
  - 世界の平和に貢献
- KOINONIA: 国家も個別には繁栄できない時代

### 多文化理解の原理

- 相互理解
- 地域言語の理解
- ステレオタイプ<sup>1</sup>の理解と活用
- 究極は、個の文化としての理解
- 多文化理解のカギは' Respect 'の念
- 脱自国中心教育、脱自民族中心教育
- 市民教育中心・アジア市民として
  - 多文化主義
- 交渉の原理(尊重と譲歩)win-win

### 教育による基礎作りの必要性

- 共生・共栄の国際観
  - 多文化観の確立
- 人類共通の善意識を共有する
  - =新しい国際倫理の確立
- 再生産する交流(持続・拡大する交流)
- 受け身の交流から自主的交流へ

### ホスピタリティ日本語に習うべき

- 思いやり
- 挨拶の発達
- 間接的な話し方
- 謙譲語・敬語
- 積極的な聞き手
  - うなずき・あいづち
- 町人文化的言語行為

### 多文化交流体験は

- 前
  - ワクワク・おずおず
- 中
  - 驚く・試みる・面白い・苦しい
- 後
  - 変わる・楽しい

### 終

- アイデンティティーの拡大
- 多文化的アイデンティティーの形成



## 私たちの日本と韓国

金囁泳（同徳女子大学校）

日本と韓国の両国は日韓ワールドカップをきっかけに、一時期以前と比べて画期的とも言えるくらい友好的な関係を保っていた。しかしそのような雰囲気は長く続かず、歴史問題や領土問題などなど色々な問題をめぐって両国は最近また激しく対立するようになった。そのせいもあって、両国では民間においても「反日」と「嫌韓」など、関係悪化の雰囲気が感じられる。このような両国における情勢を考慮すると、今回のような日韓における学生交流は大変意義があると考えられる。

では、このような交流から両国における実質的な関係改善を得るためにはどのようなことが必要であろうか。これが本講義の何よりの目的であるが、結論から言うと、グローバルな今を生きる若者は他者、つまり異文化や異国を理解しようとする姿勢を見につける必要があるということである。そのために私は、両国の若者たちが次のような点を自らしっかり考えて理解する必要があると考える。

- ・言語を勉強し、
- ・文化を理解して、
- ・お互いにおける差異確認して、それを理解しようとする姿勢を身につける

もちろん、今回の交流に参加した日本の学生たちは韓国語を、韓国の学生たちは日本語を勉強していて、その中では外国語として相手の国の言葉を専攻している学生もいる。よって、基本的な言語に関する関心や理解はある程度、一般の人々よりは高いと思われる。しかし、言葉だけでは問題は解決しない。言葉には文化という無形のものを含んでいるからである。例えば、外国人と話して言葉がある程度通じてても、その言い方や言葉が表す内容などに対して違和感を感じた経験は、外国語を勉強して外国人と話したことがある人であれば誰でも持っているものである。例えば、韓国人における日本人のイメージは「何を考えているのかが分からない」、つまり日本人には本音と建前があって、日本人が正直ではないような気がするという話をする韓国人が少なくない。しかし、実際に韓国語とそれが含んでいる文化的な要素を見てみると、韓国語にも日本の本音と建前のような要素がたくさん含まれていることが分かる。例えば「今度、また遊ぼうね」「今度、飲みに行こう」という発話における「今度」のように。

私は単純に言葉を勉強することで他国・他の文化の人々を完全に理解することは難しく、言葉が含んでいる文化というものがどのようなものであるのかという認識、或いは発見・発想が必要であると考え。そのような認識があってこそ他者が自分と異なる、少なくともそのような可能性があるということが理解できるようになるのだと考える。それがあってからこそ、そのような違いはある意味、程度の差、考え方の差というものから生まれるのだという認識、つまりより高いレベルにまで思考の幅が広がって行くのである。もちろん、それが全部ではない。これは言わば準備運動のようなものであって、そのような差異をどのように受け入れるかという姿勢が最も大事なところである。

それは、差異をそのまま受け入れて、相手をそのまま直視する姿勢。それがグローバルな今を生きる若者に何より大事な姿勢であると私は考えるのである。

日本と韓国、韓国と日本の間には、すでに言葉の交流が始まっている。お互いの言語がお互いの文化圏で受け入れられている。このような動きは、日本と韓国における文化的・感覚的な交流の可能性を見せているものであると私は思う。残っていることは、次世代を

担うことになる、今回のフォーラムに参加した学生たちが、お互いに相手をどのように理解するかという姿勢にかかっていると考えている。